

文芸おぢや第四十五号 二〇二五年発行

文芸 おぢや

第45号



文芸おぢやの会
小 千 谷 市

はじめに

小千谷市長 宮崎悦男

『一枚の紅葉かつ散る静かさよ（高浜虚子）』

実りの秋が訪れ、紅や黄に色づく木々がひとときわ鮮やかな彩りを見せる頃となりました。芸術の秋、食欲の秋、スポーツの秋など、人それぞれの秋を楽しまれていると思われまふ。目まぐるしい毎日の中でも、小さな楽しみが日々の潤いとなることでしよう。

そして、白い雪に包まれる冬があつと言う間にやつて来ます。季節の移ろいを楽しみながら、自らの感性を豊かにする良い機会となることでしよう。

さて、今年もここに伝統ある「文芸おぢや」第四十五号が、関係各位のご尽力とお寄せくださった皆様方の熱意により発刊の運びとなりました。

応募作品は、最年少十歳から最高齢九十四歳までの幅広い年齢層の五一五名の皆様から四部門合わせて一二二点もの力作を寄せていただきました。作品を寄せてくださる皆様方の篤き思いに感謝するとともに、脈脈と流れる「文芸おぢや」への愛着と誇りを感じまふ。どの作品にも応募された方々の感性が豊かに表現されていて、大変素晴らしいです。

なお、今回は市長賞・教育長賞・公民館長賞を選定していただき、入選された一六二点を掲載いたしました。応募された皆様自身のこれからの作品作りに生かしていただくとともに、本誌を手にした市民の皆様から、文化や芸術などへの興味や関心を今以上に高めていただき、「文芸おぢや」の応募へとつながることを期待しています。

そして、長年続いてきた「文芸おぢや」が、今後も大勢の皆様の投稿で作り上げられ、発刊を重ねた誇りある文芸誌として末永く愛されることを願っています。

結びになりますが、この発刊に当たりまして、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に心より御礼を申し上げ、併せて私の稚拙な一首を記して序といたします。

才光る「文芸おぢや」手に取つて文字の泉へ共に飛び込む

令和七年度「文芸おぢや」第四十五号入賞者

短歌の部

市長賞

澤田典子

徳島県

「耳遠き母はほほ笑み頷きぬ医師が病名告げしときにも」

教育長賞

小野小乃々

和歌山県

「遠雷は夏野のそらみ産み月の胎に怯えのちいさく兆す」

公民館長賞

松田早苗

茨城県

「金継ぎを施しながら想ふかなとほき昔の壊れし恋を」

俳句の部

市長賞

渡辺 勇三

奈良県

「敗戦を知らざる遺影夏座敷」

教育長賞

関 省 吾

蕨生

「生きてゐる証しとばかり草むしる」

「人の世も大地も焦がす大旱」

公民館長賞

山 本 浩

蕨生

「尊しと仰ぐ九十歳の月」

「新潟に生きて稲穂と共に老ゆ」

選考基準

得点は合点とし、同点のときは特選の多い方、さらに作品の受付が早い方を上位としました。

川柳の部

市長賞

中 静 憲 夫

長岡市

「特上のウナギをのせて備蓄米」

教育長賞

光 風 雫

福井県

「笑顔しかさしあげられるものがない」

公民館長賞

石 坂 信 一

栄町

「果樹園をひとりで仕切るいぶし銀」

詩の部

市長賞

り
ゆ
ぱ
ん

城内四

「55年目の同窓会」

【応募作品・応募者数】

短歌	二九二首	一五四人
俳句	五七二句	二〇七人
川柳	三二五句	一一八人
詩	三六編	三六人
合計	一二二五点	五一五人

目次

はじめに	1
短歌の部 入賞者	2
俳句の部 入賞者	3
川柳の部 入賞者	4
詩の部 入賞者	5
短歌	
田宮 朋子 選	7
小島 なお 選	9
松田 愼也 選	11
俳句	
神野 紗希 選	13
高田 正子 選	16

川崎 陽子 選	19
山本 浩 選	22
吉原 幸男 選	25
川柳	
山倉 洋子 選	29
山崎 草太 選	31
詩	
八木 幹夫 選	33
編集後記	46

表紙絵・挿絵 佐藤由雄氏



田宮朋子 選

特 選

耳遠き母はほほ笑み頷きぬ医師が病名告げしときにも

徳島県 澤田典子

(選評)

高齢の母の受診に付き添った作者。病名はわからないものの深刻な病氣と推察される。「ほほ笑み頷きぬ」は聞こえないためだが、母の穏やかな人柄が出ている。告知の場面を簡潔に描写した歌。

ひとり居の部屋の空気が引き締まる電話の鳴り出す気配するとき

埼玉県 岡田孝道

(選評)

この「電話」は固定電話だろう。「気配」は、電話が鳴る直前に灯りは始める液晶画面から感じ取ったもの。「引き締まる」のは作者の心である。電話の鳴る前の一瞬の緊張をうまく捉えている。

五十過ぎて新しき職探し居る子の苛立ちし言葉受け止む

土川二 関 泰 邦

(選評)

五十歳を過ぎてからの求職活動は、それまでの経験が生かせるとは限らず、雇用条件など思い通りにいかないことが多いようだ。子の状況を見守り、苛立った言葉を受け止める親心が出ている。

佳作

獣との棲み分け危うい里山で畑作りを続ける難儀

和歌山県 山西啓子

カレンダー一枚捲るそのたびにあなたが暮らした日々が遠のく

愛知県 谷 紀之

老人に見えぬようにと気配りし颯爽と乗り席譲られぬ

京都府 北条 暦

一人来て釣り糸垂れる岩礁に風も涙もふいに流れる

香川県 樋口 淳一郎

七人の旅の宴に瓶ビール一本余す下戸の兄弟

千谷 濁川 靖子

もう此処に母は居らぬと知りつつも立って見上げる病室の窓

茨城県 久信田 史夫

過去を消す消しゴムなんかないけれど消したい過去が甦る春

岐阜県 田中 恭司

お下りの最後となりし歩行器に掴まりてゆく兄の葬儀に

平成二 星野 武二

みささぎの濠をくちなはわたりゆく女性天皇論のかしまし

東京都 野上 卓

食用に作り始めたこんにやくに花が咲き出し実を結びおり

奈良県 中村 宗一

小島なお選

特選

遠雷は夏野のそらみ産み月の胎に怯えのちいさく兆す

和歌山県 小野小乃々

(選評)

彼方に聞こえる幻の遠雷は、やがてここへ驟雨を降らす。生まれる前の命が胎で怯えているという。それはこの世に生まれることで必然的に背負う生の苦しみへの予感なのかも知れません。

ほんとうはきょうだいがいる秋の夜のネパールからの経費支弁書 京都府 木々乃 なつ

(選評)

経費支弁者は、学費などを代わりに支払う人。留学する兄妹のために援助をしているのでしょう。「ほんと」は、離れて暮らす寂しい実感とも。二国を夜の時間がふかぶかと繋いでいます。

ガマの底に流るる水音聞くやうに水蜜桃に刃を入れてゆく 長野県 穂 莉 真 泉

(選評)

ガマは洞窟のことだろうか。深々と暗い洞に響く水音を聴くように、刃をゆつくりと差し入れてゆきます。古代にはその核は神のすみかとも言われていました。水蜜桃の神秘がいまひらかれる。

佳作

飢うとて靴底食ふて戦ひきと語る教師を偲ぶ記念日

上ノ山二 風間孝子

除草へと派遣をされた白山羊は角の尖りに春の陽を突く

山口県 井ノ口 皓

耳遠き母はほほ笑み頷きぬ医師が病名告げしときにも

徳島県 澤田典子

向こう側あなたは確かにいるけれど世界を二分してる踏切

東京都 嶋田優里

やはらかな紐に飼ひたりどこへでもゆけるはずなる白きバツシュを

愛知県 遠藤雄介

百塚の桜並木で「まめだかね」だれかに肩を抱かれた気して

群馬県 外丸幸子

バス停の日傘さす手をかたむけて薄暑光から子を遠ざける

静岡県 杉山博代

「可愛いね」「大好き」「お人形さんみたい」残さず飲み込む私は怪獣

宮城県 三上奈南

土砂降りが夜を剥がして水滴のぜんぶが空へと向かう梯子

東京都 平久保好一

転職は転校よりもたやすく残暑を泳ぎきる虫の声

京都府 木々乃なつ

松田 愼也 選

特 選

金継ぎを施しながら想ふかなとほき昔の壊れし恋を

茨城県 松田 早苗

(選評)

陶磁器修復技法である金継ぎから恋の思い出へという展開が面白い。修復痕を隠すのではなく、金を施しあえて強調することで新たな美が生まれる。あの恋もそのようにできたらなあ……。

ただいまと大の字になる夏座敷子等の籠には朝採り野菜

東京都 春 風

(選評)

野菜は夜の間に養分を蓄える。だから収穫は早朝が最適という。子等は、作者に言われて眠い目をこすりこすり畑に行った。戻ればもう一寝入りしたくもなろう。味噌汁の香の漂う一首だ。

たばこ吸はぬ父の収集あまたなる遺品の中に湯宿のマツチ 千谷 濁川 靖子

(選評)

たばこ全盛の時代にはどこの宿でも客室に店の名入りの小さなマツチ箱が置かれていた。何かの折には便利だしと、記念に持ち帰られたのだろう。いかにも昭和という箱の装丁が目につく。

佳作

夕空を鵜はねぐらへと群れ急ぐ曙^{あけ}の駆除をば知るよしもなく 岩沢 谷内 カツヨ

子がくれるいろいろなもの使つてと言われるけれどついしまい込む 佐賀県 古賀 由美子

ブランド品着こなす妻と娘あり後ろを歩くノンブランドの我 岐阜県 古川 恋

もう此処に母は居らぬと知りつつも立って見上げる病室の窓 茨城県 久信田 史夫

茜空ながめつ妻と散歩する発がん一年生かされて秋 埼玉県 岡田 孝道

くしゃくしゃのティッシュがようやく人になり働きに出る朝のおかしさ 香川県 樋口 淳一郎

ヨシター!と牛の角突き力押し見事に捌く勢子の巧みさ 埼玉県 中野 泊雲

愛し人手を振る姿鳳仙花小千谷縮の浴衣を纏い 埼玉県 益田 寛大

お下がりの最後となりし歩行器に掴まりてゆく兄の葬儀に 平成二 星野 武二

筆圧をかけて書かれる止め撥ねの強き字にある君の性格 埼玉県 白藤 巳玲

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

神野紗希選

特選

月と地のあいだどこでも逃げてよし

京都府

木々乃 なつ

(選評)

生きづらさを抱えている人も、ガザや各地の戦地で怯える人も、苦しい夜はどこへだつて逃げてよいのだと、そっと寄り添った。月と地の間は広く遙か。あまねく自由がゆきわたることを願う。

噴水の飛沫を拭ふ眼鏡かな

片貝町

山口 恵美子

(選評)

噴水のそばにいますと、その飛沫が散ったので、眼鏡を外していったん拭う。無意識のさりげない動作を丁寧に掬い上げた、目の付け所が巧みだ。噴水の勢いや飛沫の光に、夏の眩しさが輝く。

手も足も無くて芋虫反戦歌

埼玉県

伊藤 一男

(選評)

芋虫には確かに手も足もない。その事実が反戦歌と合わさると、戦場で、銃後で、手足を失った人々の壮絶を思う。あるいは、手も足も出ないという言葉もある。無力でも、祈ることはできる、か。

佳作

「当分は残暑続くんだって」「マジ？」

大分県

小手川とし

八月の風哭く島に額突きぬ

鹿児島県

秋野三步

花菜風形を変えて叶う夢

鹿児島県

松下弘子

夕風やボトルシップの中は時化

大分県

小野道山

初恋や目深にかぶる踊笠

東京都

若林誠二

敗戦を知らざる遺影夏座敷

奈良県

渡辺勇三

手の届くところに杖も露草も

長岡市

山口ふうた

父けふもポテトサラダに冷し酒

新潟市

酒井春棋

猿の眼は子を守る眼や園暑し

埼玉県

小田乃理子

ざりがにや田水を濁すあとじさり

東京都

清水吉明

ワンルーム西日まみれの子の机

愛知県

斉藤浩美

花火して明日には渡米する子かな

新潟市

岩渕伊織

Tシャツの選べる君の原爆忌

千葉県

もふもふ

讃美歌やハーバリウムに檸檬浮く

千葉県

柿本苧麻

搾乳や君影草の賑はひぬ

長野県

穂苅真泉

高田正子 選

特選

洗いの多き楽しさ盆の月

新潟市

岩 渕 伊 織

(選評)

季語が「盆の月」であるから、この「洗いの月」は日常的なものではなく、例えば帰省子を迎え、俄に増えた家事を指している。今は静かな暮らしをする人だろう。少々切ない「楽しさ」である。

尊しと仰ぐ九十歳の月

蕁生

山 本 浩

(選評)

九十歳の作者が仰ぐ月だ。まどかな望月かもしれない。それとは別に一読者として私は、まず「尊しと仰ぐ九十歳」と読んだ。だからか九十歳と月が重なって見え、尊きことこの上ない心持ちだ。

地震の疵そのままなるや墓洗ふ

平沢一

吉 澤 義 章

(選評)

地域的に能登かと思うが、むろんどこでもあり得る。この墓にとつて幸いだっただのは、洗いに來てくれる人がこの世に在ること。疵にそつと触れ、思い出話をしながらいたわってくれもするのだ。

佳作

夏の空映す蛇口を磨きけり

富山県

折田 祐美子

夕日より棚田の稲穂輝いて

真人町

小宮山 道隆

弱虫の我を掠めて飛ぶ燕

兵庫県

松本 宿

八月の風哭く島に額突きぬ

鹿児島県

秋野 三步

なんとなくあるからくぐる茅の輪かな

福岡県

森尾 広志

新涼のできたての風さはさと

平沢一

横森 宏子

サドルだけ濡れずに帰る大夕立

宮城県

海 苔 和

買物の帰りも前へ跳ぶバツタ

滋賀県

吉田達郎

新潟に生きて稲穂と共に老ゆ

蕨生

山本浩

座布団にくぼみ八月十五日

埼玉県

相沢明子

片陰の直線続く城下町

兵庫県

武藤優子

マニキュアの指丁寧に門火焚く

埼玉県

植朋子

段丘の傾斜なだらか蕎麦の花

本町一

西脇理作

アラ還か、そうだよな、医者いらず咲く

大分県

小手川とし

軽トラの神輿見送る月見草

宮城県

川合進

川崎陽子選

特選

我が友の分まで生きて敬老日

奈良県

山本

啓

(選評)

親しかった友は先に逝った。「もっともっと一緒に笑っていたかったのに」特別なことは何も言っていないが、友への想いがひしひしと伝わってくる。今日は敬老日。

遠日傘くると過去を捨ててゆく

神奈川県

桑原

稔

(選評)

やわらかだが、キツパリとした句である。「くると」に少しの迷いを感じさせるが、自身の感情におぼれていないところが良い。

平均の寿命越えたり百日紅

片貝町

吉原幸男

(選評)

日本人の平均寿命は男性が81才、女性は87才。喜ばしい事だが複雑な心情でもある。その心情を「百日紅」という季語に語らせている省略の妙味あり。

佳作

夏の空映す蛇口を磨きけり

富山県

折田 祐美子

子を抱きて父走り出す二重虹

千葉県

近藤 孝

母の衣似合ふ齡や土用干し

片貝町

宮島 さち子

簡素なる郷土料理や秋うらら

神奈川県

竹澤 聡

二歳児の笑顔翔け出す若葉風

長岡市

矢島 佳子

新潟に生きて稲穂と共に老ゆ

蕨生

山本 浩

敗戦を知らざる遺影夏座敷

奈良県

渡辺 勇三

約束のやうに集まる落葉かな

兵庫県

武藤 青波

紫陽花や明日は解体さるる家

茨城県

久信田 史夫

過疎といふ命の叫び曼珠沙華

鹿児島県

秋野 三步

どくだみを一輪挿して夢路館

片貝町

佐藤 裕子

集まりてもの言いたげな夏の雲

東京都

風 月

手も足も無くて芋虫反戦歌

埼玉県

伊藤 一男

過疎の地の消えぬあの灯は夜学の灯

山梨県

ル ー キー

勝敗は己おのれにありや雲の峰

大阪府

大西 陽子

山本 浩 選

特 選

生きてゐる証しとばかり草むしる

蕓生

関

省 吾

(選評)

この世に一度しかない尊い命、この世の証しを何か残したいもの。見れば大事に育てた野菜の畠に雑草が我物顔で伸びている。動く手足を使って生きて居る証しとばかりに雑草をむしるのだ。

夏うぐひす更地となりし生家かな

千谷

濁 川 靖 子

(選評)

猛暑の中うぐいすが鳴く声を聞く、寂しいと思うのは私だけだろうか。何百年続いた生家を、継いでくれる子を持たず今潰そうとしてアパート暮らしをしている。やがて我が家も更地と化す。

星涼しいのちある身の有りがたさ

岩 沢

渡 邊 智 子

(選評)

「星涼し」のあまり見かけない季語だが、澄んだ秋の空に無限とも思はれる大小の星、見ていると猛暑の夏がうそのよう。この世に命のあるありがたさをひしひしと感じている一句。

佳作

分校の足洗ひ場や梅雨の明け

長岡市

若月里の

縁側で山を見つめる帰省の子

埼玉県

相沢明子

母の衣似合ふ齡や土用干し

片貝町

宮島さち子

まる顔と言はれて久し秋の暮

大阪府

森重深鶴

声聞かぬ句友は「施設」合歡の花

長岡市

澤柳潤

人の世も大地も焦がす大旱

蕓生

関省吾

あぢさゐに雨の濃淡ありにけり

片貝町

宮島さち子

「ぢつちやん」と呼ぶ大声や夏休み

滋賀県

吉田達郎

ちぎれても秋の雲行く空が好き

兵庫県

三木崇弘

草紅葉一期一会の句会かな

本町一

関川洋子

生きものの命を削り夏果てぬ

大阪府

築林歌子

段丘の街に風なし草いきれ

本町一

関川洋子

秋暑し悠々自適に泳ぐ鯉

茨城県

湯本康二

鎌置いて軒の日陰に一服す

元中子

斉藤ハルイ

母送り夫も送りて盆の月

片貝町

大矢あきこ

吉原幸男選

特選

敗戦を知らざる遺影夏座敷

奈良県 渡辺 勇三

(選評)

遺影の方は敗戦も知らず、故郷にも帰れず、外地に散って愛する肉親をみつめ続けている。戦争を知らない人々がすぐ百パーセントにならんとする日本。夏座敷を今、平和な風が吹き抜けてはいるが。

草紅葉 一期一会の句会かな

本町一 関川 洋子

(選評)

一生涯に一度限りの句会等と少し大袈裟な感じもするが、毎月の句会等もその要素を常にはらんでいる。今日の句会のメンバーに明日以降も会えるとは限らない。季語「草紅葉」が効いている。

秋の午後図書館に居る孤独かな

東京都 鈴木 英晴

(選評)

図書館の持つ宿命的な孤独感は、誰もがうすうすとは感じていたのではなからうか。このことをズバリと言われると、そうかと納得させられる。ましてそれが日の短い秋の午後のことである。

佳作

人生を自由に編んで妻の春

兵庫県

松本 宿

新涼のできたての風さはさと

平沢一

横森 宏子

声聞かぬ句友は「施設」合歓の花

長岡市

澤柳 潤

人の世も大地も焦がす大旱

稗生

関 省 吾

核廃絶八月の声八十年

片貝町

太刀川 竹之

再びの闇に散りゆく花火屑

東京都

野上 卓

朝焼をいつせいに舞ふレース鳩

長岡市

山口 ふうた

一千万灯り東京熱帯夜

神奈川県

桑原 稔

海の日や戦争へ父征きしまま

東京都

小林 和子

もめごとは白紙に戻し冷奴

東京都

鈴木 英晴

秋日和埴輪の笑みに母偲ぶ

大阪府

打浪 紘一

清水汲む音の傍ら志城句碑

桜町

佐藤 三代子

夜半の秋主語も動詞もない会話

埼玉県

相沢 明子

もてなしは涼しい風の抜ける部屋

片貝町

大矢 あきこ

ダイヤ婚過ぎて一年合歡の花

長岡市

矢島 佳子





山倉 洋子 選

特 選

特上のウナギをのせて備蓄米

長岡市

中 静 憲 夫

(選評)

地球が一時壊れてしまったのかと天を仰いだり、地に伏したり、自然の恐怖に脅えて過ぎた数日間——人間は強かった。生きるという人間の本能が自然の人間の力を目覚めさせてくれた。目の前に揺れている稲穂の波、農家の方々は絶える気持ちで田んぼを回った。

果樹園をひとりで仕切るいぶし銀

栄町

石 坂 信 一

(選評)

今までにも何度か思いがけない災害や恐怖を体験してきたが、そのたびに立ち直ろうとする人間の力と根性にエネルギーをもらった。幼い子供から年寄りまで心を一つに助け合う姿。その一家の中でも「いぶし銀」の大切な柱に何度力をお願いされたことか。

上手くいく時には神を信じます

福島県

白 瀬 美智男

(選評)

八十年。恐ろしい原爆・戦争。わが家も父は戦死。すぐ隣のお父さんも戦死。どうしてこんな悲しい騒ぎがおきるのだろうか。

「どうか上手くいきますように」友だちとのケンカ親戚とのケンカ、ケンカの無い世の中にならせてください。神さま、どうか神さま——。

佳作

新米を待つ心にも秋が来る

埼玉県 結 慧 愛

変わらない景色にほっとできる郷

埼玉県 関根 一雄

鯉よりもよく泳いでるうちの嫁

長野県 おすしくん

令和でも俺は親父が怖いまま

北海道 佐藤 信太

豊作は民の努力の賜物だ

神奈川県 ペンペン 25

ドローンと消える旦那はパチンコ屋

大阪府 吉川 智子

戦争を知らずにのたり八十二

奈良県 渡辺 勇三

本当に出て行かれたら困るしなあ

宮城県 川合 進

マンションは昔とんぼを追った丘

北海道 佐藤 信太

そこここに昭和を閉じた商店街

神奈川県 下村 修

特選

山崎草太選

笑顔しかさしあげられるものがない

福井県 光風 雫

(選評)

川柳は人を詠み、そして自分を詠むことで、自分を見つめ直すものと聞かされております。この句から作者の心根が感じ取られました。気負うことなく、さらりと十七音に纏められた作句力にも感心致しました。貴方の真心を笑顔にのせて、孤独な人々に生きる力を与え続けてください。

少年は涙にそっと夢を知る

埼玉県 坂井 傑

(選評)

この句には詩的感覚があり、見過ごすことが出来ませんでした。少年の涙は純粋です。その涙は広大な未来への一滴です。この句の作者の年齢、性別を私は知ることはできませんが、少年の夢を叶えるための、悲しみや悔しさの涙は、キラリ輝いているはずだから。

陽も風もたとと味わい草書体

岡山県 八木 五十八

(選評)

草書は行書をさらにくずし、点画を略したものと知りました。作者は人生の半ばを超え、歩んで来た人生を振り返っての句ではないかと思えます。イソップ童話の「北風と太陽」を思わせます。複雑な人間関係、気候変動ものり越え、悟りの境地に達した我が身を草書体に喻えられました。

佳作

ふるさとはやさしさ包む白い雪

埼玉県

結 慧 愛

奥底に愛されたかった僕がいる

奈良県

桜 田 紗奈子

少しでも曇ったままで見る鏡

埼玉県

岡 田 孝道

令和でも俺は親父が怖いまま

北海道

佐 藤 信太

到着の違う切符を持つ夫婦

兵庫県

谷 口 修平

音楽に恋を映して君を待つ

埼玉県

坂 井 傑

少しずつ本音あらわれ生ビール

東京都

小 林 和子

本当に出て行かれたら困るしなあ

宮城県

川 合 進

風呂立てる通じぬ孫に腹立てる

長岡市

中 静 憲夫

柔らかな着地となりぬ里の道

千葉県

山 田 明

詩

特選

八木幹夫選

55年目の同窓会

城内四 りゅばん

中学卒業の翌年 祭りの喧騒も 夜空を彩る
大輪の花火も 漆黒の闇に萎んで消えた
この街にもう 君はいないと知った

つむじ風のように突然現れ 早口で喋り
また風になって どこかへ駆けて行った
手のひらを逃れ 飛んで行った蝶のように

鼻にかかる甘い声 輝く瞳で色白の
転校生の「15歳の少女」

軽やかにピアノを弾く 白い翼を持つ天使
僕は石膏像のように 凍りついて動けない
廊下で出会うたびに目を逸らす シャイで

痩せっぽちな「15歳の少年」

夕暮れの 学校帰りの小径を先廻りして
青いインクで書き殴った 詩のノートを手を
震わせ渡し 背を向け走った

教室に突然君は現れて 若草色の文庫本を
黙って置いて行った 「若き日の思い出」
本のタイトルが 君の返事のように思えた

黒塗りのタクシーを降りた 上品な
純白の髪の女性を見ても すぐに気づけない
遠い日の 「15歳の少女」だって

困惑した様子で 僕をじっと見つめる君に
「ほら、僕ですよ」と名乗ったら
懐かしい 暖かな笑顔が戻ってきた
「今でも 詩は書いているの？」

昔と違う 落ち着いた穏やかな声

「今はもう」 僕は言葉の続きを探す
君の口元が動いて それを聞こうとした時
進行役のマイクの音が会場に響き渡った
やっと繋がった糸を ハサミで断つように

ああ 目を閉じると 悪戯な目で笑う君

白壁の校舎を走る小さな人影 戯れながら
ひらひらと舞う 対の黄色い蝶々

黒髪が風に揺れ 君は半ば怒ったように
口を尖らせ 僕を追いかける

ポプラ並木の間を ジグザグに逃げる僕

ガラスの砂時計の 金色の砂がさらさらと
蜂の細い腰を伝って流れ落ち 今度は僕が
君を追う 終わらないゲームのように

時の旅人よ 急ぎ足で去って行く 風に
追われたちぎれ雲の切れ間から 時折姿を
現す満月 雄大な光 水面に揺れる月光は
波紋を広げながら 僕の遠い記憶の一片を
眩い程に照らすから

いつか途切れた会話の続く日に
この詩をそつと君に贈るのだ

(選評)

同窓会というイベントはどこか気恥ずかし
く、参加不参加にもちよつとしたためらいを
感じるもの。作者は思い切つて参加。かつて
の憧れの女性が目の前に立っている。十五歳
の少年は同い年の少女にかつて詩を贈ったの
だ。情熱はあのと時のまま。作者の思いの深
さに引き込まれる。「ああ 目を閉じると 悪
戯な目で笑う君」これがりゅばんさんの思い
込みだとしてもそれはそれで美しい。思いが
あの55年後の少女に伝わるといいのですが。

二本木駅にて

愛知県

大江

豊

夜行を

乗り継いで

早朝の長野から

冬の直江津に向かつて

昔ながらの客車で

運ばれて行ったことがあった

左手に山ぎわを

走り始めて 次第に

右手も山が寄って来たかと思

うと そこは峡谷で

土手の下に谷川が

流れていた

樹々の根方は

積雪で見えなくなり

連結器が軋み 機関車に

牽引された客車が

傾斜を曲がりながら

登っているようだった

積雪はさらに増して

埋もれた樹々が

遠ざかつて やがて

妙高の山並みが

見えてきた

スキー客が去り

がら空きになった

客車がそこから速度を増し

揺れと共に右手の方から

山並みが引いて 妙高山から

下りに下って朝のひかりが

射し込んで 雪の原が

右手の車窓に開けた

斜め右手に

湾曲しながら

思いのほか長いホームへ

外に出るとどこまでもホームが

続いている 雪に

埋もれているせいか

黒々と曲がつているせいだろう

ホームに降りる者は片手もない
時間待ちをしていると

汽笛が鳴り 次々と客車が

軋み うしろ向きに

走り出した

引き込み線に

入りスイッチバックした

進行方向右手にまわり

まっすぐになり速度を上げた

雪の原をこのまま日本海へ

時刻表を取り出して

一日の行程を決めよう

上越のS先輩のこと

思い出しながら

(選評)

昨年も大江作品を取り上げましたが、この作品は長野から直江津までの夜行列車の旅の情景を描いたもの。細部が的確に描写されて移り変わる雪景色や時間に味わいがあります。事件めいたものや個人的な感慨は極力省略され、描写に徹して旅の静かな奥行きが生まれました。「時刻表を取り出して 一日の行程を決めよう 上越のS先輩のこと 思い出しながら」実に巧みな詩の終わり方です。あえて二年連続特選に選んだ理由です。

佳作

限られた日々

群馬県 笠原 メイ

空腹でべちゃんこの腕に
注射針が突き刺さる朝

頭の片隅で常に死を意識している
薄い唇がずっと開いているから

夜は煙草が燃え尽きるよりも短い

どうでもいいことを、どうでもいい時に、
どうでもいい感じで話せる人が好き

私の体温から飛び降りた歌が

無事に地面に着地できるか見届けたい
林檎より重たく、花びらより軽い声

血が通っているようで、通っていない旋律
長年、古ぼけた教会の写真を集めている

壁一面に貼って、祈ることもせず
十字を切ることもなく、

ただ、自分の痛みと向き合う

そして賞味期限切れの天使と接吻をする

詩人は限られた日々を生きている

おかげで見えないものが見えたり

聞こえない音が聞こえる

主治医は病気の症状だと言うけど

くじらが住めるほど大きな水槽があれば

小さな海と言ってもいいはず

そんなことを考えながら

激安スーパーマーケットの有線から流れる

「1985」に気持ちよくなっている

何百回も聞いた音楽や

結末を知っている映画の退屈さを

愛おしいと思えること、

それが老いというものだろうか

（選評）

ひとつひとつの表現に鋭い感性を感じます。「私の体温から飛び降りた歌 無事に地面に着地できるか見届けたい」「ただ、自分の痛みと向き合う　そして賞味期限切れの天使と接吻する」目前には深刻な現実（死）が迫っているのかもしれませんが、強く生きることが願っています。詩にはこうした「限られた」世界にいる人を精神的に救済するちからがあります。笠原さんの目がとらえた「老い」とは希望かもしれません。

彼とは

愛知県 愛玲

大きな背中にがっしりとした体軀

声はあの有名な韓国ドラマに出てきた俳優に似ていて少し跳ねた髪先に共感を覚える

私と彼が初めて出会った日

田舎の大学生と外国の留学生

そんな垣根を越えて

大学の講義室で目を合わせた瞬間

あ、この人だ

そう思わせられた

きつと神様は

この日のためにずっと

空の上で準備していたに違いない

マッコウクジラのような穏やかな目

職人歴があるごわごわとした手は

鍛錬を積み重ねてきた歴史が見える

学生だった私たちは

お互いの夢を語りあい

国や文化を超えて

時を過ごしたものだ

彼の家族が来日した時も

一緒に水餃子を作り

言葉が分からなくても

心で通じ合えるのだと気づいた

いつからだろう

マウンテンゴリラが居座った体型で

うなだれている様子を見せたのは

おそらく感染症が全世界に蔓延した頃だ

家族とビデオ電話できるものの

対面で会えない寂しさを隠しながら

ひたすら耐える彼の姿は

私の心をぎゅっと掴んで離さなかった

これがいわゆるホームシックなのだろう

来日して何年経っていても

彼の魂は彼の故郷にあり

日本ではないのだと知った

いつか渡航できる日が来たら

彼の故郷へ一緒に帰ろうと約束すると

淡い茶色の瞳がきらりと光り

マウンテンゴリラは胸を張った

それから数年経ち

私たちは彼の故郷へ渡った

フライト前からそわそわする彼は

求愛中のゴクラクチョウのように

空港の中をせわしなく動いていた

彼の家族と友人を見つけた瞬間

ばあっと砕けたような表情で

近くに寄り再会をかみしめていた

これからもきつと

彼の心の中には

彼の故郷があり

彼の家族や友人がいるのだろう

そして

その中に私も入っているに違いない

（選評）

日本人と海外の人との出会い。国際結婚も多くなりました。彼と出会い、一目ぼれ。描写の比喩が実に面白い。目はマッコウクジラのやさしさ、坐った体型は落ち込むマウンテンゴリラ、そわそわする姿はゴクラクチョウ。出会いからその家族との出会いまでがユーモラスに描かれ、愛玲さんの愛情が溢れています。

冬の予兆

東京都
野上
卓

病み上がりの少年の
白い脛のような晩秋のある日
君の投げつけた砂時計は
ぼくの頬を切った
今日の血は
精液のにおいをする

外をみやると
柿の実が色づいて
時の流れが一段とあざやかだ
だが この数秒のひどく長いこと
ぼくには言葉はなく
君にも言葉がない

不吉な予兆は
泥のように
ぼくの体の芯に澱みはじめ

もうすぐ冬がくる
春を望まぬ冬が
今年こそ来るような気がする

ぼくは なにをまつてるのだろう

(選評)

冬という季節そのものを人物化(少年)して不吉な予兆を感じ取る野上さんは冬の気配に何を見ているのでしょうか。抽象的なことを具体的にとらえ直す表現が必要です。年齢から推察すると少年とは死を象徴するのでしょうか。

クローバの花の冠

大阪府 打浪 絃一

廃材とトタン屋根でできた家がずらりと並ぶ
子どものわたしにも分かる貧しさが漂う集落に
同級生のせつちゃんに住んでいた
学校を休んだ彼女に

先生から預かったプリントを届けるために
わたしはこわごわ集落に入った

「怖いところだぞ。あそこに近づくな」と
いつも大人たちは言っていた

立ち並ぶ家はみすばらしく
道はじゅくじゅくとぬかるんでいた

周辺に立ちこめる暮らしの臭いが

大人には耐え難い悪の象徴に思えたのだろうか
わたしは迷うことなくせつちゃんの家を見つけて
プリントを渡す役目を果たした

せつちゃんのお母さんに会い言葉を交わした
やさしい笑顔がせつちゃんそっくりで

わたしの中の集落への恐怖心は無散した

大人が作り上げた意識の壁を

子どもたちはいとも簡単に乗り越えた

集落にあるクローバの咲き乱れる広場で

みんなが友だちになって遊んだ

女の子はクローバの花で冠を編み

みんながおとぎの国のお姫さまになった

広場は子どもたちの天国になった

でも、それはつかの間の楽しい時間だった

その日は突然やって来た

地域開発の名のもとに

集落は取り壊され

せつちゃんの家族も立ち退かねばならなかった

わずかな家具とともに

リアカーに乗ったせつちゃんの頭には

子どもたちが贈ったクローバの花の冠があった

みんなは何も言えずただそれを見送った

集落の跡には鉄筋コンクリートの団地が

時代の先駆者のように誇らし気に立ち並んだ

街がきれいになったと大人たちは喜んだが

大好きだった広場はなくなり

多くの友だちが泣きながら転校して行った

広場の跡にはすべり台とブランコが

新しい団地の住民のために造られた

あれから七十年

その団地も老朽化した

せつちゃんや当時の友だちの消息を知る術はない

春が訪れ道端にクローバが咲き出すと

リアカーに乗って遠ざかって行く

せつちゃんの頭に飾られた

白い花の冠がほのかに臉に浮かぶ

(選評)

打浪さんの少年時代にはあちこちに自分たちとは異なつた貧しい生活を強いられた人々が沢山いましたね。子供はいつも公平な目でものを見ようとしますが、大人たちは差別の壁を作り、そこに近付かないようにと警戒します。でもクローバの冠は今でも自由と平等のシンボルのように輝いています。心優しい作品となりました。

小さなゴジラ

東京都 橘 一洋

ドアを開けると小さなゴジラが立っていて
たしかにわたしの夫だった
背格好ですぐにわかった
手に鞆を持っているし
いつものように夜遅く

キッチンテーブルに

ゴジラの夫は座る

麦茶を入れると

麦茶を黙ってすする

縫い目がなく着ぐるみじゃないみたいだけど

「会社のパーティとか？その格好」

「重いの？」

何を訊いてもガーガーと要領を得ない返事

両生類の臭いが少しする

「お風呂にする？」

ゴジラはうなだれて立ち上がり
浴室に入ると

ばしゃばしゃと音をさせてすぐに出てきた
バスタオルを渡して浴槽をのぞくと
湯は半分ほど減っている

カップラーメンを作ると
ざっと大きな口に入れて
缶ビールをぐっと流し込む
テレビをつけたけれど見ていない
大きなあくびをした

「もう寝る？」

ゴジラはうなずいた
毛布を持ってきてリビングの床に寝かせる
倒れるように横になると
すぐにガオーと大いびき
疲れている感じはいつもとおなじ
わたしはベッドで寝た
ゴジラのいびきが気になったけれど
そのうち眠りに落ちた

真夜中に

いきなりおおいかぶさってきた

重い ゴジラの夫だ

「何するの、バカ！」

跳ねのけてゴジラの下腹部に

思い切り蹴りを入れてやった

クフーツとカエルみたいな息をして

ゴジラはベッドの横に倒れてそのまま寝た

朝になった

「時間よ！」と起こす

のろのろと起きたゴジラは

パンとミルクを口に放り込むと鞆を持って

ガガガッとあわてて会社に行った

ゴジラと住むにはここは狭いわ

食費もかかりそう

会社から手当ては出るのかしら

(選評)

作者は女性かと思いきや、男性。ゴジラは女性の目からみずから素描したもの。実的確に男の日常の生息をとらえている。まるでゴジラ。きりつとした奥様の姿も見えてくる。平和で明るい夫婦像が浮かぶ。

編集後記

今年度は、約百五十名の皆様から、約二百九十首の応募作品をお送りいただきました。市内から二割、県内の近隣市町村から若干名。そして県外から約八割の内訳となりました。応募作品のキーワードとして、錦鯉、小千谷縮、花火、闘牛、雪などが散見され、小千谷らしさを感じました。戦後八十年ということから、昭和、平和の語も見られました。今、ここに歌の花々が咲き匂っています。多数の皆様のご応募に感謝申し上げます。

編集委員 短歌部門 佐藤 弥生

文芸おぢや俳句大会に地元小千谷をはじめ全国より沢山の応募をありがとうございました。暑い暑いと言っているうちにようやく秋の気配が感じられるようになってきました。朝晩涼しくなり夜は、コオロギなどの虫が盛んに鳴いています。

秋らしくなりようやく秋の季語を使っても違和感を感じなくなりました。十一月の初めに立冬があり、あつと言う間に一年が終わります。今年は、秋刀魚が豊漁だという。近くのスーパーで一尾一二八円で売られていました。手ごろな価格で栄養豊富な秋刀魚を食べて暑さで疲れ切った身体をいたわってあげたいものです。

編集委員 俳句部門 濁川 靖子

今年も多数の川柳作家の句に触れる機会をいただき誠にありがとうございました。川柳は奥が深いと言われていますが、私はその前に間口が広過ぎると感じております。

最近の川柳は表現だけのユニークさを競う傾向が強くなり、川柳の三要素の一つでも満たして、五七五に仕立て上げた句が巷に氾濫しております。それを悪とは言いませんが、人間（自分）の真実を描写した川柳にもっともっと出逢いたかった。

編集委員 川柳部門 山崎 草太

「小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ 緑なす繁縷は萌えず 若草も藉くによしなし しろがねの衾の岡邊 日に溶けて淡雪流る」島崎藤村の名詩「千曲川旅情の歌」の詠い出しである。十代の時に暗誦した此の詩は、私の心に深く残り、永遠に魅了し続けている。今私は、山本山の頂部に佇み、信濃川を眺めている。越後三山を背にして蛇行する雄大な様に言葉を失う。信州の人たちは信濃川を千曲川と呼ぶ。藤村の詩に深い親近感を覚える。私は今思う「『文芸おぢや』よ 永遠にあれ」と。

編集委員 詩部門 中山 正則

今年も「文芸おぢや」第四十五号をお届けすることができ、安堵しております。審査員各位をはじめ、弊誌の発行にご尽力いただきました皆様にご心から感謝申し上げます。

今年も従来からの郵送による作品応募に加えて、インターネットを通して入力フォームからの応募もあり、市内外から多くの作品が寄せられました。全国の皆様から注目され、小千谷市を知ってもらえるよい機会となっていることを感謝いたします。

今後もし小千谷の文芸活動がますます発展し、多くの皆様から愛される文芸誌となるよう努めてまいります。

事務局 谷口 則子

新保 有華
新保 ひより

文芸おぢや 第四十五号

令和七年十一月二十二日 発行

発行 文芸おぢやの会

小千谷市

印刷 大川印刷株式会社